

# 訶梨帝母の形相の二類性(下)

——図像学的考察——

田代有樹女

## 目次

はじめに

一、アジア諸地域における訶梨帝母像

(一) ガンダーラ

(二) マトウラー

(三) ネワール

(四) アジャンター

(五) チベット

(六) コータン

(七) トルファン

(八) ジャワ

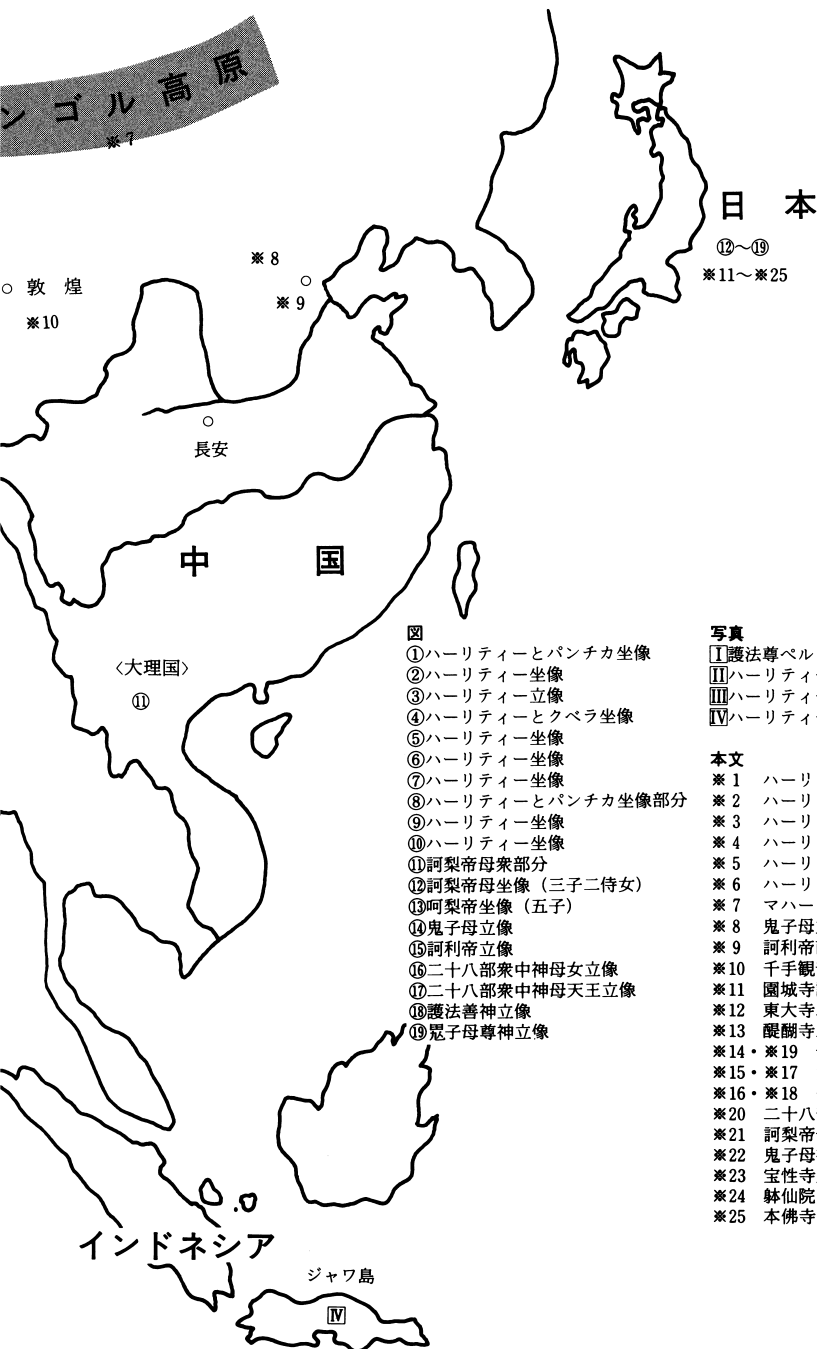
(九) 中国

二、我国における訶梨帝母像

(一) 柔和尊

(二) 忿怒尊

結び



# 図

- ①ハーリティーとパンチカ坐像
- ②ハーリティー坐像
- ③ハーリティー立像
- ④ハーリティーとクベラ坐像
- ⑤ハーリティー坐像
- ⑥ハーリティー坐像
- ⑦ハーリティー坐像
- ⑧ハーリティーとパンチカ坐像部分
- ⑨ハーリティー坐像
- ⑩ハーリティー坐像
- ⑪訶梨帝母衆部分
- ⑫訶梨帝母坐像（三子二侍女）
- ⑬訶梨帝坐像（五子）
- ⑭鬼子母立像
- ⑮訶利帝立像
- ⑯二十八部衆中神母女立像
- ⑰二十八部衆中神母天王立像
- ⑱護法善神立像
- ⑲鬼子母尊神立像

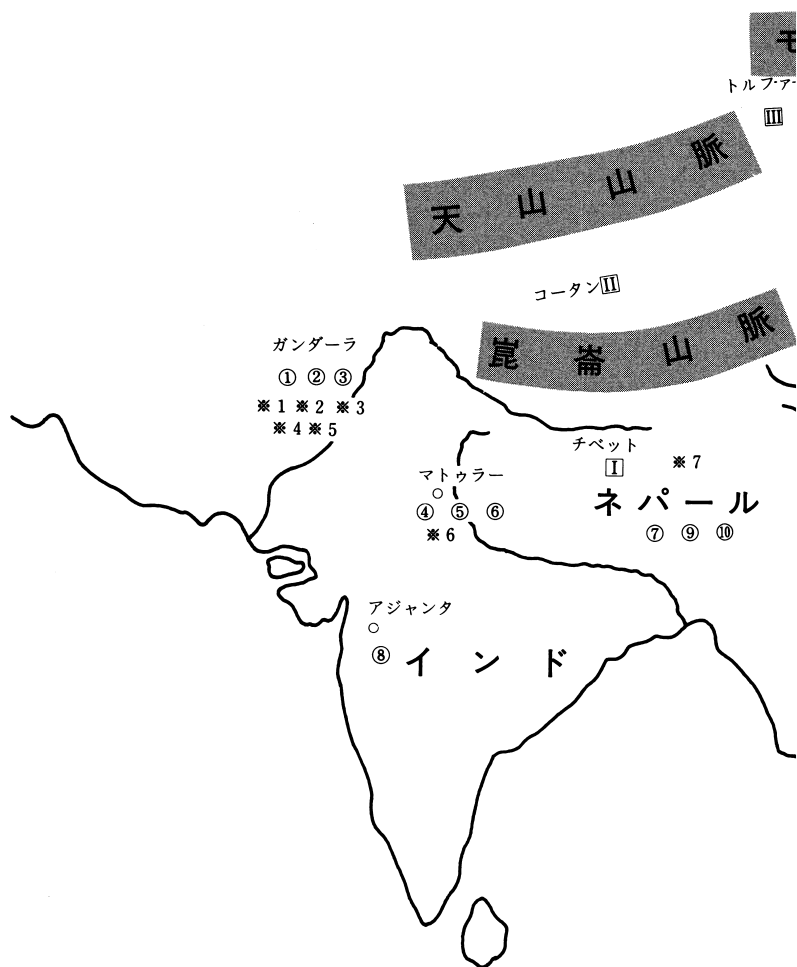
# 写真

- I 護法尊ベル・ラモ
- II ハーリティーと五人の童子
- III ハーリティー母子像
- IV ハーリティー母子像

# 本文

- ※ 1 ハーリティーとパンチカ坐像
- ※ 2 ハーリティーとパンチカ坐像
- ※ 3 ハーリティーとパンチカと侍者坐像
- ※ 4 ハーリティー母子立像
- ※ 5 ハーリティー坐像
- ※ 6 ハーリティー・クベラとラクシミー坐像
- ※ 7 マハーカラ
- ※ 8 鬼子母立像
- ※ 9 訶利帝南天立像
- ※ 10 千手観音立像中夜写天女
- ※ 11 園城寺訶梨帝母坐像
- ※ 12 東大寺二月堂參籠所食堂訶梨帝母坐像
- ※ 13 醍醐寺三寶院訶梨帝母坐像
- ※ 14・※ 19 十六大護図及訶梨帝母
- ※ 15・※ 17 宝楼閣経曼荼羅及訶梨帝母
- ※ 16・※ 18 七星如意輪曼荼羅及訶梨帝母
- ※ 20 二十八部衆中神母天立像
- ※ 21 訶梨帝母坐像
- ※ 22 鬼子母神立像
- ※ 23 宝性寺別院鬼子母尊神立像
- ※ 24 鉢仙院鬼形鬼子母神立像
- ※ 25 本佛寺鬼形鬼子母神立像

詞梨帝母掲載図版、写真及び本文〔注※〕関係地図



—注—

便宜上時代を異にする  
地名を共に掲げた

## はじめに

仏陀釈迦牟尼像の起源を、クシャン王朝時代とするように、訶梨帝母像<sup>(かりていも)</sup>も、二世紀頃には、ガンダーラとマトウラーにおいて造像されていた。訶梨帝母像の発祥もその時期でその地域であると考え、仏教伝播と共に東漸し、アジア諸地域に広められたその尊容の、現在に至るまでの変遷を追ってみたい。

訶梨帝母の神格は、仏教発生以前から存在していたとみられ、<sup>(1)(2)</sup>原形は地母神や豊饒神<sup>(ほうじょう)</sup>、葉叉女の像などに溯る<sup>(さかのぼ)</sup>ことができる。またヒンドゥー神の中には同系と思われる女神もみられるが、<sup>(3)</sup>本論では訶梨帝母<sup>(4)</sup>(ハーリティーなどの名称を持つ)として作られた像を取りあげて図像学的な考察を中心に行っていきたい。

まず二―三世紀頃における、ガンダーラ及びマトウラーでのハーリティー彫像の尊容を述べ、順次ネパール、インドのアジャンター、中国、日本での彫像や画像に加え、コータン、トルファン、ジャワ島、チベットなどの地域色豊かな尊像についても、各々代表的な訶梨帝母像をとりあげ述べていきたい。

我国の訶梨帝母像では、柔和相と忿怒相の二類の形相のうち、<sup>(5)(6)</sup>特に後者に焦点をあて、そこには三種つまり、天母形忿怒尊、護法尊、鬼形尊の異形式が認められ、さらにその中の鬼形鬼子母神像を二形態に分けることができると考え、各々の尊容について考察していき、しばしば論述してきた通り、忿怒尊の発祥を、我国へ請来される以前に求めるべきであるとする点を明らかにしていきたい。

## 一、アジア各地における訶梨帝母像

## (一)、ガンダーラ

ガンダーラにおけるハリーティー像は、パンチカと二神並坐像で造られたものと、独尊では坐像と立像の彫像が現存している。

ハリーティー像の最古の作品をいつ頃とし、どのような像形であったかは推察の域を越えないが、ガンダーラ地方での二・三世紀当初のものには、パンチカとの二神並坐像(図1)をその代表としてあげることができよう。

疱瘡神であるばかりではなく、豊穡多産のシンボルでもあるハリーティー女神と、福德財宝の守護神としての主神、夫パンチカの、二神への熱い信仰は、ガンダーラという通商盛んなシルクロードの中継地にあつて、当時の社会的背景を大いに反映したものであり、この二神像は盛んに作られていたと思われる。ペシャワール博物館蔵のシャリー・バホール出土のパンチカとハリーティー像<sup>(7)</sup>や、シャー・ジ・キ・デリー出土のハリーティーとパンチカ像<sup>(8)</sup>をはじめ、多数の石像が現存している。

これらの二神像は、牀座<sup>しょうざ</sup>に倚坐<sup>いざ</sup>勢をとるのが基本のようであるが、二神共に、あるいはハリーティーだけが左足を低い台座上に乗せているもの、またはパンチカだけが、遊戯坐(右舒相あるいは左舒相)をとっているものもある。

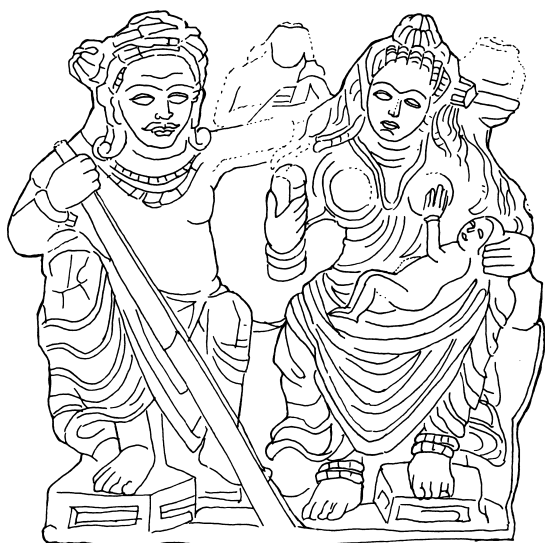


図1 ハーリティーとパンチカ坐像 ガンダーラ 個人蔵  
2~4 C.

いずれもハーリティーは向って右側であり、パンチカとはお互いに顔だけを向かい合わせるようにして並坐している。ハーリティーは結い上げたカールの髪を花綱で飾り、余髪は肩に垂らしている。薄い衣をまとっているさまは、豊かな胸から足への体の線を損なわないように、しなやかに細かく刻まれた衣文で表わされている。時には右乳房を出しているものもみられる。複数の連珠から成る耳瑣と胸飾り、飾りのついた首飾り、複数の環状の腕釧と、太い足釧で飾っている。左手では一児を左膝上で抱いているものや、膝上に立つ嬰兒を支えている像もある。この左手で支えられている嬰兒こそ、末子のピヤンカラ<sup>(9)</sup>と思われる。ピヤンカラは母神の胸飾りを左手で触れている。そしてハーリティーは右手に吉祥菓を持っている。

口ひげのパンチカは、宝冠をかぶり、下半身に腰衣を付けている。大きな耳瑣や、飾りのある首飾り、それに蛇の胸飾りと臂釧を付け左手には財布を持ち、右

手では杖槍を握っている。

ハリーティーとパンチカの持物については、時として両腕あるいは片腕が欠失してしまっている場合があるうえ、この二神像は素朴な作品から精巧な像まで膨大な数にのぼるため、その総てを把握、確認することは難しい。

子供の数は抱かれているものも含め、三児から数児と一定ではないが、二神の肩越しや膝、足元で戯れ、まつわりついている。また二神の足元から下部、鏡板との間に数児の立像が遊び戯れているように浮彫されているものなどが現存している。

ハリーティーの眷属として夫や子供の他に、時には侍者を従えている像なども造られており、二神像はつまり富と生産の象徴であり、また家族神としての群像を表わしているとも言えよう。

またハリーティーとパンチカとの二神像に酷似しているフアローとアルドクシヨの二神像も存在する。男性神フアローは経済力や富をつかさどり、左手には財布、右手には杖槍を握り、アルドクシヨは大地の豊穡をつかさどり豊穡の角（コルヌコピア）を持っている。この二神像もやはり、富と生産の象徴と考えられる。いずれの像にも円形の頭光を具す場合が多い。

※

独尊の坐像では個人蔵のハリーティー倚坐像（図2）が代表されよう。この像でもウェーブの髪に花綱の髪飾りをしていて、結い上げた輪状の髪を飾りの奥に出している。額には白毫を思わせる円形のロゼッタ飾りをつけ、複数から成る連珠の耳環と連珠の胸飾り、環状の首飾りと腕釧、足釧を付している。薄い布のサリーをまとい、透けたように胸の形があらわれている。そのわりには、膝から足首を覆う布は透けたようには彫られていない。



図2 ハーリティー坐像 ガンダーラ 個人蔵  
2~4 C.

一児の頭を左手で支え、膝上に乗せている。両肩、両膝のまわりには四〜五人の嬰兒がまつわり、戯れている。

両つま先は欠失しているが、牀座の背もたれが肩越しに見えており、頭には円光を具している。

この像は、石造自体の下部と、向って左側部分が不自然に欠損し、左右のバランスが不均衡とも思われる上、顔をやや左に向けている点、また子供の配置される状態などからあるいは元来はパンチカとの二神像ではなかったかと推察される。

現在、大英博物館蔵のハーリティー(註4)倚坐像では牀座

の背もたれや、光背はみられないが正面を向き、左右の均整がとれているなどの点から、明らかに独尊として造像されたものと思われる。

この像でも同じように頭上で結いあげた髪を輪状にし、花綱の飾りをつけ余髪は垂らしている。耳環、首飾り、連珠の胸飾り腕釧と環状の足釧をつけている。薄手のサリーをまとい、やはり胸の部分だけが透けたように表現されている。

一児を両膝上に横たわらせ、左手で頭を、右手で足元を支えている。またハーリティーが両足を置いている台座





図3 ハーリティー立像 ガンダー  
ラ マルダン地区出土 個人  
蔵 2~4 C.

上の中央には一児が片膝を立てて坐しており、他に牀座脇の両足元には、各々三児ずつの遊び戯れる立像が彫られている。

この像でも、今までに述べた坐像でのピヤンカラと同様に、ハーリティーの連珠の胸飾りを左手でさしのべており、母神は、笑みをたたえてる柔和の相で表現されている。

独尊の立像で代表的な作品としては、ラホール博物館蔵のシクリー出土のハーリティー立像<sup>(12)\*5)</sup>、個人蔵マルダン地区出土のハーリティー像(図3)などである。やはりウェーブとカールの頭髮に花綱飾りをつけ、垂髪がみられる。額にはロゼッタ飾りを付け、耳環、飾りのある首飾りと胸飾り、複数の腕釧で飾っている。薄手の衣服は体の線に添うように衣文を細かく垂らしながら上半身と下半身を覆っている。ハーリティーは左手で、その余布をさりげな

くたくし上げ、さらに布を左肩から背後にまわし右膝に垂らしている。これはサリーを表現したものと思われる。豊かな胸の膨らみは着衣の上からもその形をうかがい知ることができる。時には右乳房<sup>あふろ</sup>を露<sup>あらわ</sup>にしている。

ハーリティーの右手には、一児が抱かれている。それがピヤンカラであろう。嬰兒は右手で母神の右乳房をまさぐっている。さらにハーリティーは二児を両肩に乗せている。二児は各々持物を持ち、ハー



図4 ハーリティーとクベラ坐像 マトウラー マトウラー博物館蔵 2 C.

リティーの頭に手をさしのべるようにして立っている。ガンダーラ彫刻における倚坐勢は、今日最も一般的に使用されている高さの椅子に、腰掛けた体勢であり、時には低い台座に足を置く場合もあるが、両膝を開き、足首を揃えながらもやや開きぎみにした自然なポーズ、いわゆるヨーロッパアンスタイルをとっている。これらの彫像は、グレコ・ローマ風の美に満ちており、ハーリティーの顔の表情や、作りも、その特徴を示している。

## (二)、マトウラー

マトウラーにおける彫像でも、二〜三世紀当初と思われる作品については、独尊の他に、クベラとの二神並坐像が多く作られており、時には姉妹分であるラクシミーとの三神並坐のものも現存している。現存するものとしては、マトウラー博物館蔵のハーリティーとクベラ像(図4)、ハーリティー・クベラとラクシミー<sup>(13 ※6)</sup>などである。

パンチカは古代インドでは、ヤクシャの首領クベラの

將軍として信仰されていた。財宝の神クベラや、ヤクシャの主神バイスラーバーナ（毘沙門天（多聞天））の信仰は、ガンダーラでも顕著であった。ここマトウラーでは、パンチカの名を用いず、クベラ神として登場している。クベラはまた勝利の神でもある。パンチカは大黒天、クベラは毘沙門天、あるいはその逆に、我国で呼ばれている。マトウラーでのハーリティー像は、坐像のものが主に作られていたようで、立像の作品については、まだ遺品が現われていない。いずれの坐像も、膝と足首を開いてしゃがみ込むように腰を低くした倚坐勢である。

クベラとハーリティー坐像でもやはり腰を低くした倚坐勢をとっており、ハーリティーが向って右側で、左手に一児を抱いて左膝上に腰かけさせるようにしている。大きめで太い首飾り、胸飾りと足輪、複数の環状の臂釧と腕釧で飾っている。右手は、肘を曲げて右膝に付けるようにして手首を上に向けている。手には何か持物を握っているようなポーズを取っているが、指の部分から先が欠損しているため持物については不鮮明である。また顔と頭の一部も欠失しているので表情を見て取ることはできないが豊かな乳房を露あらわにしている。

クベラは大きな宝冠を戴き、やはり太い首飾りや臂釧、腕釧、足釧を付けている。ふっくらした頬と大きな目をしており眉間には円形の白毫がみられる。そして大きな腹をつき出している。左手と腹の間で財布を抱え、右手は肘を曲げ右膝に付けて上にあげ、指には何かを握りしめている。

また三神並坐像では、中央がハーリティーのようであり、右側はラクシミー、左側がクベラと思われる。三神共同じような倚坐勢をとっており、右手は上げているが肘を曲げ右膝につけ、左手では持物を持っている。共に顔部分が欠損しているので表情をみることはできないが、大きな耳環や臂釧、腕釧をつけている。ハーリティーとラクシミーは胸飾りもつけ、ハーリティーの左腕から豊かな胸、そして腹にかけては、元来一児が彫刻されていたと思われる痕跡がみ



図5 ハーリティー坐像 マトゥラー 大英博物館 2～3 C.

られる。ラクシミーは左手を受けるようにして持物を掌に乗せている。クベラは、大きな腹をつき出している。これらの衣服については、像の欠失や磨滅が甚だしいため、明確ではない。

※

独尊像では、大英博物館の倚坐像（図5）をとりあげてみよう。飾り柱に囲まれたアーチ状の仏龕の中で、やはり、しゃがみ込むような倚坐勢をとり、髪を結い、大きな耳環、首飾りと太い足釧、それに連珠の胸飾り、環状の複数の腕釧をつけ、下半身に布を巻いていると思わせる腰帯が腹の部分で結ばれている。また足首には環状に弧をえがく刻みが数本みられるので、あるいはそれは衣文とも考えられるが、足にまで布が覆われているとは思えないほど、足の形があらわになっている。

左手では一児の腰を抱えるようにして左膝に腰掛けさせている。嬰兒は左手でハーリティーの豊かな乳房をまさぐっている。右手はやはり肘を曲げ右膝にのせ手を上にあげている。掌で持物を握りしめているが量感のある持物が、いったい何であるのか明確にはとらえられない。顔は鼻が欠失しているものの大きな瞳と唇、ふくよかな頬から柔和尊であることは明確である。

両足の間には一児が坐している。両手を曲げるようにしているさまが動的に表現されている。



図6 ハーリティー坐像 マトウラー  
マトウラー博物館蔵 2 C.

龕の上部には二飛天が刻まれ、二本の飾り柱の下方には一对の童子が彫られている。

また現在、マトウラー博物館蔵のハーリティー倚坐像(図6)も同様の倚坐勢をとっている。現在の状態では、仏龕はなく、頭部、そして右腕から先と、両膝部分が欠落しているが、首飾りと飾りのある臂釧、環状の腕釧と太い足釧をつけ、また豊かな胸の間には装飾のある胸飾りがさがっている。腰帯が腹で結ばれており、すねには衣文とみられる刻みが見えているが、やはり足の形は、あらわになっている。

嬰兒は小さく表現されており、楕円上に乗せ、それを腹の上に置くようにして左手で支えている。ハーリティーの足元には数子が彫られているようであり、足の間の二児は坐して戯れている。右の足脇には従者と思われる腹の大きい人物が坐し、両手で持物を握るようにしているが、残念ながら、頭部より上が欠失してしまっている。下足部から鏡板の間には、数人の戯れる子供とみられる浮彫が施されている。

マトウラーにおけるハーリティー像はいずれも胸は豊かで、へそを出している。したがって着衣は下半身のみにとまっていると思われるが、足までも布が覆っているような表現はなされておらず、坐す足の膝から足先までは、体の形で表現されている。

これらの倚坐像については、ガンダラ像とは異り、ほとんどしゃがみ込んでいるか、相当低いあるいはすねの高さまでもない椅子に、膝と、ややつばめてはいるものの足首とを開いて、腰掛けているような坐勢となっている。他にマトウラーの坐像より、ややヨーロッパアン坐勢に近いと思われるが、類似性が認められる点で注目したい像として、後で述べる、ネパールのバーラージュ寺の石彫（図8）をあげることができる。

ガンダラ及びマトウラーにおけるハリーティー彫刻の像高は、平均して三〇センチメートルから一メートル程度（<sup>19</sup>）のものが多く残されているようである。

以上概要を述べてきたが、次にインドのアジャンターにおける、二神像についてふれてみたい。

### （三）、アジャンター

インドのアジャンター第二窟奥右祠堂には、パンチカとハリーティーの二神並坐像（図7）が本尊として祀られている。像高はパンチカで台座とも、二・七三メートル（<sup>19</sup>）で、紀元六〇〇年から六四二年にかけて造られている。

この像ではハリーティーは向って左側である。パンチカの方はやや大きめに造られているが、二神共、右舒相の遊戲坐で、同じようなポーズをとっている。

ハリーティーは右手の肘を右膝に曲げて置き、掌を前に向け指先で枝付きの吉祥菓をつまみ垂らしている。左手では一児を抱くようにして左足に乗せている。巻毛の嬰兒は、耳璫、瓔珞、臂釧、腕釧、足釧で飾り、右手に球状の持物を持ち、左手を左足にのせ座っている。

ハリーティーは、螺髪状の巻髪に飾りを付け、環状の耳璫、宝玉の連なった首飾り、そして花綱とも思われる胸飾り、



図7 ハーリティーとパンチカ坐像部分 インド アジャンター 7C.

紐状に垂れた胸飾り、そして飾りのある臂釧と腕釧、足釧を付けている。衣服は、サリー状の薄布をまとっているとも思われるが、乳房や足の形はあらわになっていない。腹と足には衣文とも思わせるかすかな刻みが見えている。左足下の台座には腰帯かサリーの余布であるうか、天衣のような形が刻み込まれている。

左右つながるほど長い眉、切れ長ではあるが彫りの深い大きな目、鼻筋の通った高くて大きい鼻と厚い口唇、そして肉のない頬とあごなど顔の特徴は、このアジャンタ石窟寺院の随所にみられる壁画の登場人物や、古代インド画に描かれている人物の顔と類似しているものであり、この二神像が造られてから一三〇〇年以上も経ち、すでに磨耗しているものの、インド人独特の表情は、損なわれることなく、今でも明確に見て取ることができる。

白毫があったかどうかは、磨滅のため定かではない。頭には円光が付されている。

パンチカもハーリティーと同様に、右手を右膝上に置いてあるが、掌を上向きに受けるようにして持物を持っている。おそらく財布であろう。左手は肘を曲げ牀座の丸味のある手に置き、掌をやや下げるようにして指を揃えている。豊かなカールの髪に宝冠を戴き、飾りのある大きな耳環と首飾り、そして宝玉のついた環状の腕釧をつけている。左の肩から右脇腹にかけて長い胸飾りをまき、腕には、蛇を表現したと思われる臂釧が三重程に巻かれている。腹には腰帶ともとれる刻みがあるが着衣は確認できない。やはり左足下の台座面には長い布をたゆませたように表現した刻みが施されている。パンチカの背部には縦長の楕円形の頭光が付され、ハーリティーとやはり同じような特徴を持つ顔つきをしている。

折り曲げている左足では、ハーリティーが足首をそのまま延ばし、指を正前に向けているのに対し、パンチカは足裏を上に向けている。降ろしている右足膝は、左足の付根より高くなっており、すねの長さより低い台座に左足だけを乗せている様にみられる。パンチカでは腹の上まで右膝が上っている。

二神が並坐する台座下方には一一体の子供の像が浮彫りされている。遊び戯れる子供の中には二児が羊と戯れている。二神の両脇には弘子を持つ侍者が立ち、両神の間に樹下の葉又女が配されている。また左上隅には母子に説法する仏、右に仏に襲いかかる四臂の悪神が浮彫されており、大レリーフが造り出されている。当初は、極彩色が施されていたようで、現在は剝落しているものの所々に、辰砂や、群緑、緑青、胡粉などの彩りが残されている。光背などは白かったのであるうか胡粉の跡が見える。

ここでのハーリティー彫像は、パンチカとの二神並坐像であり、右舒相の遊戲坐であることが、特徴点となる。次にネパールにおける彫像をみていきたい。



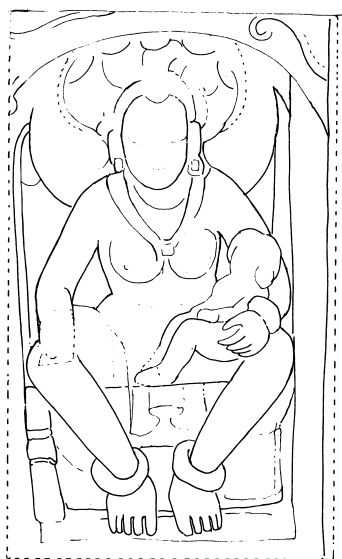


図8 ハーリティー坐像 ネパール  
バーラージュ寺 2~3 C.

#### (四)、ネワール

ネパールのカトマンドウ周辺に現存する五体のハーリティーについては、その詳細をすでに論述したので、<sup>(16)</sup>ここではこのうち三体についての尊容の概要にとどめておくが、多少重複のあることを、断わっておきたい。

バーラージュ、チャパトーラ、タンヒティにおけるハーリティーの順に述べていくことにする。

カトマンドウ盆地を中心としたネワール地方に現存する最も古いと思われるバーラージュのハーリティー(図8)は、二階建てのハーリティー祠堂の中の、トーラナと飾り柱に囲まれた、アーチ形を有する長方形の仏龕に安置されている石像である。像高は七〇センチメートル、幅四〇センチメートルでヨーロッパ坐勢に近い、倚坐勢をと

り、膝を開き、両足をややつぼめて王座形の牀座に座している。台座の足には簡単な飾りが施されている。

右手は肘を曲げて、右膝に下ろしている。手首から光は失われ磨耗しているが、像及び、祠堂入口上部のトーラナ中央に彫刻された像容から、おそらく手のひらを外に向けて、垂らしていたのではないかと推測される。左手では一児の腰をかかえ左足上で抱いている。手足は大きく表現されており指も太い。

耳環、腕釧、特に環状の足釧は大きく、首飾りも太

く胸までさがっている。臂釧は、磨滅のためか認められない。上半身は裸で、胸は、磨耗しているが、乳房は豊かである。下半身には腰から薄い布をまとい、胯間の台座に垂れた布のひだが刻まれている。足は布に覆われてはおらず、あらわになっている。

頭部と顔はそうとう磨滅しているため、頭髮、表情などは不明瞭である。両肩あたりから円形の頭光が彫り出されておき、頭部近くに五龍王と思われる彫刻が、磨耗はしているが、認められる。

子供は一児だけで、ハリーティの左股に腰かけるようにして抱かれている。顔は磨滅が甚だしく表情をつかむことはできない。足を揃え左手をハリーティの腹のあたりにおいているが、持物については判明できない。

現在この像の手足には、信者達により、赤と黄の色香が横縞状にすり込まれているため本来の黒灰色をとどめず、彩られている。

※

チャパトーラのハリーティ（図9）はネワールではハーラティ・アージマーと呼ばれている。現在民家の中庭に置かれている高浮彫の石仏で、高さ六二センチメートル、幅五二センチメートルで、上辺を弧にする方形の石板に、五児と共に曲線の美しい、繊細な彫刻で表わされている。

ハリーティは台座上に右舒相で遊戲坐勢をとっている。右足は膝を高くして垂らしており、折り曲げる左足は足裏を上に向けている。右手は肘をやや張り出して曲げ、右の股にあてた手のひらを外に向けて球形の持物を握っている。左手は、肩と肘を張るようにして、左足に垂せた一児の腰を支えて抱いている。頭部と顔面、そして胸部と腹の一部及び左膝の一部が欠損しているので、表情は全く判らないが、頭頂部には結髪か、髪飾りを思わせる彫

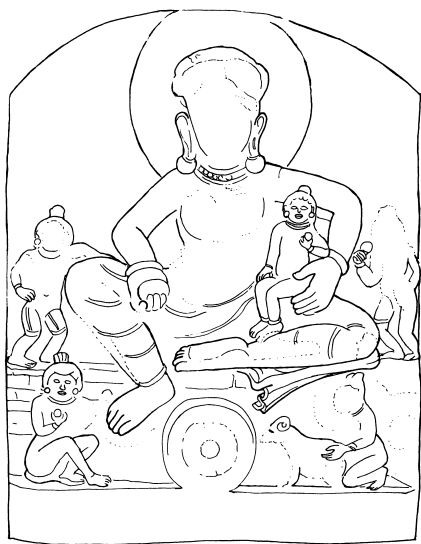


図9 ハーリティー坐像 ネパール チャパトー  
ラ 個人蔵

りがあり、頭光の輪光が線刻されている。両腕はほっそりしていて丸みがあり優しい感じであり、胸の膨らみの痕跡は残っている。

大きな玉形の耳環、細かい連珠の首飾り、環状の大きな腕釧に比べ、細い足釧が刻まれているが臂釧はない。下半身に薄い布をまとっているのであらう細く弧を描くような衣文の二重の線が、腹と足に刻まれており、余布のひだが左足の下で、台座上から少し垂れるように表わされている。足は布で覆われてしまうのではなく、身体の形として彫り出されている。

子供は五児で、手足の細い裸体で、動的に表現されている。抱かれているのはピヤンカラであらう。ハーリティーの左膝で両足を膝から足先までを揃えて座っている。右手は右膝に置き、左手を曲げて球形の持物を持っている。ハーリティーの両膝脇にはそれぞれ一児ずつが母神によりかかるように立っている。左側の子供の右手には持物が握られている。台座は二段になっており下段部分の前面には、向って左側に一児が球形の持物を持ち座っており、右には羊と戯れている子供が座している。この場面はアジャンターでの子供の一光景を思い出させる。それぞれ髪を結い上げ、玉形

の耳飾りと、環状の腕釧それに足輪を付けている。

台座下段の中央には円輪が彫刻されている。また上段から下段にかけての前面には、石組のような互い違いになった線刻がなされている。

この像の製作年代は、五〜七世紀頃とみてよいであろう。

※

カトマンドウ市内のタンヒティには、市北西にある聖地スヴァヤンブーの仏塔を中心とした寺院に類似させた寺院空間が、小規模ながら同じように建てられている。

ハリーティー祠堂も仏塔の脇に同じようなネワリー様式で建てられている。その中に安置されているハリーティーは、スヴァヤンブーの石像を模刻したといわれる金銅の押出仏(図10)である。祠堂の規模はかなり小さく装飾なども少なく、ハリーティー像も複製であるが、スヴァヤンブーの彫像にほぼ近い像形をしており、オリジナルでは、信者達による供物が像に付着しており、また石像のまわりに取り付けられた金属製仏龕の装飾が像の頭部を覆っているが、ここタンヒティのハリーティー像ではかなり明確に全容をとらえることができるので、一例としてあげることにした。

この像はカトマンドウでは、ハーラティーと呼ばれている。

飾り柱と屋根形によって囲まれた仏龕の中で五児と共に表わされたハリーティーの像高は約六〇センチメートルで、右舒相の遊戲坐勢をとっている。宝冠を戴き大きな環状の耳環と、胸飾は飾りの施された幅広いものと連珠の環珞を付け、宝珠形の飾りのある臂釧、腕釧と足釧を付けている。



図10 ハーリティー坐像 ネパール タンヒティ寺

太い眉と大きな目、鼻、口、そして大きな耳で、おだやかな表情を見せている。右手は二の腕を体に添わせ、肘から手首にかけては右股ヒザに添わせて乗せ、手首を膝からすねに向けてさらに同形に添わせるようにして曲げて掌を外に見せている。掌には菱形の千幅輪が刻まれている。左手では一児の腰をかかえるように左膝に抱いている。曲がっている左足の足裏は上に向け、つま先を斜め下にして降ろしている。上半身は裸で、円すい形のような乳房があらわであり、下半身にはサリーであろうと思われる縦のひだが腹から左足の下方

と右足下後方へ延びるように表わされ、さらに余布のドレープが弧を作るように左足下に垂れている。足には衣文が施されているが、この像でも、やはり足の形は明確になっている。

子供は五児で、一児は抱かれており、両肩にはそれぞれ背後から両手を出して立ち、右膝後ろに一児が立ち、もう一人は左側、ハーリティーの左膝あたりで正坐をしている。それぞれ髪を美しく結い上げ、耳環、胸飾、腕釧をしている。

ハーリティーの手には持物はみられないが、宝冠に続く打出しの両端から鎖でつながれた食器パトラが腹のあたりに下がっている。

表現については、あまり動的な作品とは思われない。制作年代は明らかではないが、スヴァヤンブーのハリティーは五世紀を溯ることはないであろうと思われる。

ネパールでの倚坐像では、坐勢はガンダーラ彫像のそれと類似しているが、量感のある肉体表現はマトウラーの像に近い。また遊戯坐像では垂らしている足を床面に水平に降ろすのではなく、かかとをやや上げている。

ガンダーラやインドでのハリティー像をネパールの彫像と比較してみると、かなり人間味強く、写实的である。この点については釈迦牟尼像や他の仏教美術作品にも同様のことが言えよう。ネパールでは二神像のハリティーはみられず、独尊となる。

ここで注目したいのは、倚坐勢から遊戯坐への推移である。ガンダーラでの二神並坐像では、時にはパンチカダケが遊戯坐勢をとっていたものが、アジャンターでは二神共遊戯坐で現わされている。やがて倚坐勢の独尊へと変遷し、その過程の中で、ハリティーは遊戯坐勢を多くとるようになっていくのである。そして時代が降る程、写実から遠くなり、女性像は天女形となり、チベット仏教や、いわゆる密教の影響を受け、女神像としての色彩を濃くしてくるのである。

では、チベットではどのような女神像をハリティーと呼んでいるのであろうか。

#### (五)、チベット

ハリティーは子育ての守護神であると同時に、仏教を擁護し、伽藍や厨房を守る女神である。西域地方の諸寺

院では、門屋の処、または食厨の辺の壁画に描かれていたことが、『南海寄歸内法傳』によっても知らされており、それと合わせて、大黒神の木彫が、柱や門の前に彫られていたことも記述されている。また『歴代名画記』や『寺塔記』などにも、しばしば中国などにおいて鬼神や、鬼子母神が寺院や庫院に描かれていたことが述べられている<sup>(17)</sup>。チベットには忿怒の相をした、マハーカーラとペル・ラモが寺院の勤行堂<sup>18</sup>前壁<sup>\*7</sup>やタンカに描かれている。チベット仏教美術では、大黒天のことをマハーカーラと呼び、訶梨帝母をペル・ラモあるいは、ペルデン・ラモと言っている。大黒天のことは我国では摩訶迦羅<sup>まかから</sup>天とも呼び、大國主命と習合して財宝、福德の神として七福神の一つに加えられているが、我国での大黒天の起源がこのマハーカーラであるとするには異説もある<sup>(19)</sup>。カーラとは黒、また時、死神を意味する。

ペル・ラモについては吉祥天母像とする意見もある。ラモはチベット語であり、サンスクリット語ではシュリーデーヴィーと称される。シュリーが吉祥の味を持つので吉祥天となるのであろう。

しかし、ペル・ラモを吉祥女神とするならば、その夫としてマハーカーラを毘沙門天(多聞天)とするべきであり、またガンダーラでの夫パンチカをバイスラバーナ、つまり多聞天(毘沙門天)と訳せば、鬼子母神を妻とするのではふさわしくない。チベット護法尊の中には、別にクベラ神が含まれていたりで、言語的には多少の曖昧さが残るのは、仏教以外での福德、財宝、豊穰、多産の神々が、やがて仏教に取り入れられた時点で、従来の神格に加え仏教の護法尊となり、さらに国々を渡り、経軌に整理されるまでには、時間的な経過を要した以上に、まず乗り越えなくてはならない宿命的な言葉の問題を抱えていたことにもよるであろう。

名称での問題や、図像の断定は、外国のしかも方言しか伝わらない地域での取材、調査にあたっては、非常に困

難な場合がある。かつての西域や、チベット、インド、中国での仏教の摂取や、布教の困難さは想像以上のものであったと察せられる。

チベット僧侶であるビカウ・スマティ・サンガ (Bikhu Sumati Sangn) 氏の説明によると、この忿怒女神ペル・ラモ (写真Ⅰ)こそハリーティーであると言う。柔和相のものは、ラクシミー、サラスヴァティーであるとも説明された。

この忿怒相ペル・ラモは、身体は青く、黄色い馬に乗り、人間の生皮の上に横向きに坐している。髪を逆立て、目をむき、第三眼を持ち、口は大きく白い歯をむき出している。右手では刀剣を振り上げ、左手は血の入った髑髏杯カパーラを持っている。手足は筋肉質で、爪は長くのびている。上半身には天衣をまとい、下半身には動物の皮を付けている。頭には五つの髑髏宝冠を付け、首飾りや細い環珞、臂釧、腕釧、足釧等の装身具を付けている。また頭頂の孔雀尾の扇は梵天から、右耳の装飾獅子はクベーラ神から、左耳の装飾の蛇はナンダ竜王、手綱に付けられている人間の運命を決定する二個の賽子はヘーヴァジュラ (Havajra) から各々与えられた贈物と言われている。火焰光が光背のように描かれ、血の海を渡っている馬の手綱は蛇である。そして馬は臀部に第三眼を有している。ラダックのラマ教寺院には多数の忿怒尊が勤行堂前壁に描かれている。それらの多くが多臂であるのに、この女神と、マハーカーラ神だけは二臂である。訶梨帝母も吉祥天も同じく二臂とするのであるが、ペル・ラモがあえて訶梨帝母と考えられる点には、二臂であることに加え、忿怒の相を示していることにある。それは我国にも存在する忿怒尊と無関係ではないと思われるからである。

忿怒尊訶梨帝母は、我国において、それも室町時代後期か江戸初期に唐突に現われたと解釈されがちである。日



蓮以降、総髪合掌形及び有角抱児形の鬼形鬼子母像が、日蓮宗の中で、尊神として用いられるようになったからである。ところが、平安期に編さんされた儀軌の中には、訶梨帝母法に加え、すでに柔和尊と、忿怒尊の二類が所載されている。<sup>(20)</sup> 我国に訶梨帝母がもたらされたと思われる当初にははや、二類の形相が認められていることは即ち忿怒相の発祥は我国へ伝来される以前とすべきであろう。

密教色の濃い忿怒尊の発祥と密教発祥の地とは無関係ではあり得まい。チベットにおいては、これらの密教尊は十世紀前後には、そうとうの隆盛をみたのであろう。密教教理と共に、密教尊としての忿怒尊訶梨帝母像も国々を渡り、それぞれに相応した儀礼や、形像が、地域の中で培われて来たに違いなからう。

『法華經』陀羅尼品第二十六の中では、毘沙門天と鬼子母神の名が見え、後述の十六大護図中には般支迦夜叉と名を連ね、<sup>(21)</sup> 二十八部衆には神母天も毘沙門天も含まれている。また、訶梨帝母を祀る寺院には必ず大黒天も祀られていることは周知の通りである。

#### (六)、コートン

次に地域の特徴ある表現がなされている尊像を三体あげておきたい。コートン、トルファンそしてインドネシアのジャワでの遺品である。

コートン地域のファルハード・ベグ・ヤイラキ第十二寺址で、スタインはハーリティーと五人の童子が描かれた壁画(写真Ⅱ)を発掘した。その壁画は寺院の入り口の右手側面の低い所にあったといわれる。現在この壁画断片は、ニューデリー美術館に所蔵されている。

傷みや剝落<sup>はくらく</sup>が激しいので、縦五八・八センチメートル、横五五・八センチメートルの断片に描かれているこの女神が、立像であるのか坐像なのか画面全容をつかむことはできないが、正面向きのハリーティーの上半身を中心に、五人の子供の様子は見て取ることができる。

ハリーティーの顔と三児の顔は割合長く残っている。同心円の頭光背をもつ丸顔の女神は髪飾りをつけ、もみ上げにあたる部分の髪を両側共、細長く両目の下あたりまで延ばし、先を円形にカールさせている。特に顔の表現には鉄線描を思わせる線が生かされている。頬からあごの線、三道のつもりであろうか首の二本の線、それと同じ様な線描で長い鼻が顔の中心に描かれ、への字形の濃くて長い眉、切れ長に延びた半眼の目に小さな瞳。上下のまぶたの線、ひきしまった唇と二重あごの線。これらは左右対称に描かれイラン的とも言おうか独特の雰囲気をかもし出している。鼻と唇の間には丸い形が描かれている。また耳にも耳の筋とは別に、耳たぶの上部に円形が描かれているのが印象的である。

環状の大きな耳飾りをつけ、イラン風と思わせる丸首のしまった襟<sup>えり</sup>の上衣をつけている。襟元にはチロリアンテープのような紐状の飾りがついている。半袖の袖口には太い飾りテープがついているが、さらにフリルが見えている。これはあるいは臂釧であるかも知れない。胸の丸味を表現した線と、衣文の描線があり、腰には二重の小さな水玉模様の施された丸味をおびたベルトをしている。着衣にもやや大きめの水玉模様が描かれていたのではないかと思わせる剝落のあとが感じられる。頭先の輪光のまわりには幾何学模様が描かれている。右手は肘を曲げ体の前に掌をあてるようにして何かを握っている。水瓶であるらしい。左手には花か実のような枝を持っている。

子供は母神の身にまわりつくように二人は胸の前で、腰のベルト上に立っており、向って右の子は両手をあげ



写真Ⅲ ハーリティー母子像 トルファン ヤルホト仏寺址出土



写真Ⅰ 護法尊ペル・ラモ チベット



写真Ⅳ ハーリティー母子像 インドネシア ジャワ島 チャンディ・ムンドウット 8 C.



写真Ⅱ ハーリティーと5人の童子  
コータン地域 ファルハード・ベグ寺址出土 6 C.

るようにしてハリーティの胸をかかえている。左の子は両手を曲げるポーズを取り二人は向かい合っている。他の二児は両肩にまたがり、あと一人は画面の左上の方で片手、片足を高く上げ動的な姿勢を示している。五児のうち三児は裸身である。子供達に正面を向く者はなく、斜や横を向いているが、表情は母神と同様にイラン的であり、大人びた顔付きをしている。

地方色の濃い独特の表現で描かれた、慈愛深い柔和相のハリーティとして貴重な像である。

#### (七)、トルファン

トルファンのヤルホト仏寺址出土のハリーティ母子像（写真Ⅲ）は、縦五〇センチメートル、横三五センチメートルの白氈布画で、中央アジアでの貴重な遺産であると思われる。

中央にハリーティの倚坐像、その左右には縦一列にそれぞれ四人ずつ幼童が、さまざまな姿勢で、持物を持ちポーズをとっている。母神は、装飾の施された牀座にやや左向きに両足を揃えて坐している。三重の同心円の頭光をもち、ベール状の頭巾をかぶり、袖口のしまった唐風の衣装をつけている。裾の長い着衣には菱紋の柄と裾模様が施され、肩あてと前に垂らした腰帯がみえている。連珠の首飾りで飾り、くつを履いている。足下には長方形の柄織りの絨毯じゅうたんが敷かれている。ハリーティは右手に嬰兒を抱き、左手を右の乳房にそえて哺乳している。

鉄線描様の表現は前述のコータン地域の壁画に通ずるところがあるが、こちらは子供も唐子まげを結い、やや丸味のある体に小さい足など、唐児独特の姿が表わされていて、トルファン地方の特色を示すハリーティ群像と云うことができる。

## ㄅ、ジャワ

インドネシアのジャワ島でのハリーティ―母子像を、ハインリッヒ・ツインマーは『THE ART OF INDIAN ASIA』<sup>(22)</sup>の中で紹介しているので、参考までに述べておくことにする。

チャンディ・ムンドウツト遺跡入口の左右の壁面には、母神と父神と思われる像があり、伊東照司氏によると前者は訶梨帝母、後者を毘沙門天像であるとしている。<sup>(23)</sup>

その母神像は、数人の戯れる子供や侍女の群像を自然界の樹や鳥と共に景観として現わしたレリーフである(写真IV)。

ハリーティ―は、結髪と垂髪の頭に、大きくて丈の高い宝冠を戴き、耳環、胸飾、臂釧、腕釧と足釧で飾り上半身は裸形である。下半身には薄い衣をまとっているのか、腹と腰もとには浮彫りの線があるが、足の形は、マトウラーやネパールでの像がそうであったようにあらわに彫り出されている。

一児を両手で足の上に抱き、斜め右を向き正坐に近い自由坐で、樹下の台座に坐している。台座下の前面には供物であろうか、果物を盛った深い皿が彫られている。光背を具さないこの像は、母神らしく、胸は豊かで、左手側に抱かれている嬰子は、両足をハリーティ―の右足方向へ垂らし、左手は乳房にふれている。十人以上の子供達は、髪飾りと耳環、胸飾、臂釧、腕釧、足釧それに腰の飾りを付けて、樹に登ったり、馬乗りになったりして自由に遊び戯れている。台座下の侍女には一児が抱かれている。

ハリーティ―は丸顔で、やや広い鼻と厚い唇をしているが、大きな瞳で子供を見つめる表情は、柔和の相を表わ

している。子供の顔も穏やかである。女神像と言うより、母子像としての感が強いが、他には類を見ない、独特のハリリティー像と言えよう。

## (九)、中国

中国における仏教美術作品の全容を研究することは困難に近い現状の中では、訶梨帝母像についてもその例外ではない。先に述べたトルファンでの訶梨帝母像も、今日では中国の遺産と考えるべきであろうし、時代も、地域も膨大なものとならざるを得なく、把握し難い。

ここでは種類の異なつた二、三の例をあげておくことにする。

中国では、二神一体の像は現在のところみられず独尊のみである。そのうちまず立像から見ていきたい。

山西省大同の善化寺と、北京大慧寺には、印を結んだポーズをとり、持物は有さないで、忿怒尊の従者を従える立像<sup>(24)</sup>がある。袖の長い唐衣に背子を着け、前で緒を結び垂らしている。結い上げた髪に宝冠を戴き、胸飾で飾っている。柔和尊とも忿怒尊とも言い難いその姿は、後述の我国の滋賀園城寺の護法善神立像と類似している。

園城寺の『寺門傳記補録』<sup>(26)</sup>には

護法善神者。訶梨帝母神也。

と冒頭に記している。

護法善神の訶梨帝母としては、また千手観音の眷属である二十八部衆の中の神母天王<sup>(27)</sup>をあげることができる。我国では京都蓮華王院（三十三間堂）の神母天王彫像をはじめ、図像集にも多く説かれている。これらの護法尊につ



図11 訶梨帝母衆 部分 中国 大理国 張勝温筆  
『畫梵像』 13C.

いては後で我国における訶梨帝母像の項目でふれるであろうが、天母形で忿怒相をとっている。

敦煌での千手観音像の一つに、千手観音立像を中心に、まわりに眷属が描きめぐらされた絹本着彩の画像がある。現在ギメ東洋美術館に所蔵されている縦一九〇センチメートル、横一二五センチメートルの画面の向って右中程に、合掌し、左右に男児と女兒を従えた女神像が描かれており、

<sup>28</sup> \* <sup>10</sup>

女神像が描かれており、「夜写天女□□<sup>不明</sup>」と書かれた短冊形が添えられている。

頭光背を有し、宝冠を戴き、胸飾、腕釧で飾り、天衣で両腕に抱く子供を巻くようにして、千手観音を見上げてゐるこの女神は柔和相天女形である。坐像と思われるが、手前には四天王のうちの二天と思われる武将形の立像が描かれているため下半身は見えていない。

※

訶梨帝母の柔和尊坐像として儀軌に比較的忠実に描かれてみるとみられる画像に、大理国の張勝温筆による『畫梵像』の中の訶梨帝母衆(図11)がある。その図は一二四〇年を制作年代と考定されており、我国の図像集や儀軌などに説かれている像形とほぼ一致している。

母神を中心とした図様は、侍女が五人と子供九人か



図12 訶梨帝母坐像(三子二侍女)『阿婆縛抄』  
『圖像抄』

ら成る空内の情景となっている。訶梨帝母は宝宣台に右舒相の遊戲坐で坐し、右手に柘榴であろうか吉祥菓を持ち、左手では一児を抱えているが子供は外を向いている。結い上げた髪に余髪を垂らし、飾りの多い宝冠を戴き、耳瑠、胸飾、璎珞などで飾り、裙裳に襦袢衣を着け、天衣を巻いている。天衣は台座の下まで垂れている。おろしている右足は、踏割りになった氍毹座に置き、右の足裏は外に向けつま先を下にしている。抱かれています子供他には、母神の右足に一人乗りながら左足に触れている子と、それを追っている子供。他の三児は従者に抱かれそのうち一人は乳を飲んでゐる。犬と遊ぶ幼児や、侍女と共に遊ぶ子、一人玩具で遊ぶ子などで、訶梨帝母の席の前はにぎやかな様子である。画面左側に立つ侍女は幡を手にしている。

訶梨帝母の頭上には天蓋が下がり、背後には波紋の描かれた四曲の屏風が立てられている。

ここに描き出された一四人の表情は、あまり穏やかとは思われないが、それは筆者の表現の特徴とも思われるので、この像は柔和尊と言うことができよう。

我国に見られる多くの柔和尊はこの像のごとく唐衣を付け、持物には吉祥菓である柘榴<sup>(30)</sup>を持つ。今ここに述べた訶梨帝母が右手にしている果物は、楢円の果実から、先の尖った花卉が二枚のびて、柘榴を思わせる。





図13 訶梨帝坐像(五子)『別尊雜記』

次にこの像を我国の代表的な柔和尊と照らし合わせてみていきたい。

## 二、我国における訶梨帝母像

### (一)、柔和尊

我国への訶梨帝母の請来は、八三八年に入唐した円行(七九九―八五三)の『靈巖寺和尚請来法門道具等目錄』の中に記載がみられるのが最古とされている。現存する著名なものは、滋賀園城寺の坐像、奈良東大寺二月堂参籠所食堂の坐像<sup>(32)</sup>、共に木彫と、画像では、京都醍醐寺三宝院の坐像<sup>(33)</sup>などをはじめ、多数の尊像が現存するが、これらはまた、先に中国における訶梨帝母衆にみた尊容の類形であり、柔和尊としての代表でもある。我国でも二神像はみられず、柔和相独尊の訶梨帝母は、白紅色の容姿端麗で裝飾具を付け、法衣、天衣をまとい、右舒相か左舒相の遊戲坐をとり、左手には一児を抱き、右手に

は吉祥菓である柘榴ざくろを持ち、数人の子供を伴った天女形に造像するように、そしてそれを訶梨帝母法の修法に用いるように、『阿婆縛抄』『覺禪鈔』『圖像抄』などはじめ、圖像集や儀軌(35)には説かれている(図12・13)。

圖像集や儀軌にはこの他に幾多の画像が見出される。その中にはこのような典型的とも言える柔和尊ばかりではなく、天母形をとっているが忿怒尊として説かれている像も所載されている。次に忿怒尊を見ていくことにしたい。

## (二) 忿怒尊



図14 鬼子母立像『別尊雜記』

儀軌の中での忿怒尊は、天母形忿怒尊に属され、独尊ではあるが、他の尊像と共に説き現わされている点にまず特徴が見出されよう。十六大護図(36)、宝楼閣経曼荼羅(37)、七星如意輪曼荼羅(38)に登場する訶梨帝母、千手観音の眷属二十八部衆中の一尊にあたる護法尊神母天王、あるいは十羅刹女と共に『法華經』第八陀羅尼品に説かれている鬼子母などで、これらは平安期に編さんが終了している儀軌(39)にはすでに所載されていることから、我国独自の尊容とするより、請来の像形とすべきと思われる。

この天母形忿怒尊とは異形のもので、忿怒の相を示す像をさらに二類別すると、いずれも儀軌には説かれていないが、護法善神としての訶梨帝母神と、いま一つは日



図16 神母女立像『二十八部衆并十二神將圖』



図15 訶梨帝立像『別尊雜記』

蓮宗において尊神として尊宗されている鬼形鬼子母神に分けられる。この鬼形鬼子母神像の中にも、総髪合掌形と有角抱児形の二形態が認められる。

このように忿怒尊は、天母形忿怒尊、護法尊、鬼形尊に三類別することができ、さらに鬼形尊を二形態に分類することができる。

尊神鬼形鬼子母は十羅刹女を伴わず、室町時代末期頃から独尊<sup>40</sup>となったとされるもので、儀軌編さん後に発祥をみたものと言われるゆえに、一般論ではこの鬼形尊と、忿怒尊とを結びつけ、我国独自の尊容と論じられているようであるが、今述べたように、忿怒尊は鬼形のみではなく天母形も存在し、それはすでに儀軌に説かれていることから発祥をむしろ我国へ請来された以前に求めるべきである点と、鬼形の中でも総髪合掌形と、有角抱児形の形相の発祥を同じとすべきではない点に留意し、次に我国における忿怒尊各々の尊容にふれていきたい。

※



図17 神母天王立像 京都  
三十三間堂 鎌倉時  
代

諸尊と共に現わされる、天母形  
忿怒尊のうち、宝楼阁経曼荼羅、  
七星如意輪曼荼羅に描かれている  
尊容は、いずれも坐像である。宝  
楼阁経曼荼羅中の訶梨帝母像につ  
いてはすでに論じたので詳細は省  
(41)

くが、火焰の輪光を負い、宝冠と唐衣、天衣を着け、毘託座に左舒相の遊戲坐で坐している。左方を向いて右手で  
一児の腰をかかえて抱き、左手では円形の宝珠を捧げている。子供は抱かれている子も含めて七子で、訶梨帝母の  
足元を囲んで座上に遊んでいる。<sup>(42)※17)</sup>

七星如意輪曼荼羅は、如意輪観音を中心に、八輻輪が描かれ各輻輪間には北斗七星と訶梨帝母が描かれたもので、  
訶梨帝母は如意輪観音の前にあたる下方の毘託座に遊戲坐勢をとっている。左手に一児を抱き右手で吉祥菓を持っ  
ている。唐衣である襴褙衣、長袂衣を着け正面を向いている姿は、十六大護図の醍醐寺理性院流に類似するもので  
ある。<sup>(44)</sup>

十六大護図についてもすでに論じたので、<sup>(45)</sup>ここでも詳細を省くが、十六大護図における訶梨帝母は、訶梨帝大天  
後の名も用いられ、坐像と立像<sup>(46)※19)</sup>の二類形が認められる。前者は先に述べた七星如意輪曼荼羅にみられる像  
をやや左向きにした尊容であり、後者は小野流によるもので、結髪に宝冠を戴き、垂髪を垂らし、襴褙衣、長袂衣  
等を着け、杵を履いている。持物はなく両手を前にして、袖の中に入れている。首には三道が見えているが光背を

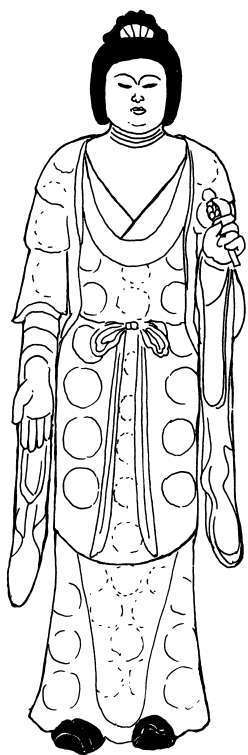


図18 護法善神立像 滋賀 園  
城寺 鎌倉時代

具すものと具さないものがあり、毘毘座に立つか、台座なしの場合もある。そして子供は一児も伴っていないのが特徴といえよう。

同じく立像で子供を伴わないものとしては、二十八部衆の神母天(神母天王)があげられる。画像では『佛像圖彙』<sup>(47)</sup>で神母天、高野山金剛三昧院蔵本『二十八部衆并十二神將圖』では神母女(図16)の名で著わされており、彫像では京都蓮華王院(三十三間堂)の神母天王(図17)を代表としてあげることができる。

いずれも宝冠を戴き、唐風の着衣をつけ、天衣をまとい、杵をはいている。持物はなしか、両手に法器を持つ。神母天王像では頭光を具すが、火焰をあしらった輪光となっている。

訶梨帝母の含まれる曼荼羅は、密教の修法に用いられるものであり、二十八部衆は、千手観音信者を擁護する護法善神とされている。

仏教を擁護するべく善神として、訶梨帝母は仏教に導入された時点で護法尊となっているのであって、その思想は古くから經典にも説かれている。チベットでの護法尊はペル・ラモであり、我国では護法善神である。

※

護法善神の代表としては滋賀園城寺の護法善神立像（図18）があげられよう。結髪に宝冠、唐衣を着て、沓をはく姿は、神母天母と類形と思われる。右手は垂らし、左手に吉祥菓を握っている。子供は伴っていないが、左の足元に童子像が置かれ、右手を女神に差し延べている。園城寺『寺門傳記補録』第四によれば、護法善神は訶梨帝母であり、もとより大夜叉女であったという縁起が説かれ、天龍八部等の中にもこの名がみられるとしている。八部衆では夜叉の名で著わされ、夜叉女、つまりヤクシニーの造像の発祥を求めるならば、インドのマウリヤ朝にまで溯ることができよう。

ここでは、坐像柔和尊に対して護法尊が立像であることは大きな特徴といえよう。『別尊雜記』には坐像訶梨帝（図13）と立像鬼子母（図14）が描き分けられ、『佛像圖彙』<sup>(48)</sup>では、訶梨底母は坐像<sup>(※21)</sup>、十羅刹と共に立像の鬼子母神<sup>(※22)</sup>、そして二十八部衆の中では神母天立像が描き分けられている。

仏教を擁護しまた仏教を信仰する人々を擁護する護法善神としての訶梨帝母は、やがて日蓮宗においては、法華經及び法華經信者を擁護する尊神として十羅刹女から独立し、いわゆる鬼形鬼子母神として尊崇されるに至った。

※

鬼形鬼子母神の総髮合掌形と有角抱児形のうち、特に前者の中山総髮合掌形<sup>(49)</sup>と伝わる立像（図19）は、護法善神としての訶梨帝母と同様、唐衣をつけ踵を履き荷葉座に立つ。結髪、宝冠はなく巻髪と垂髪がみられる。両手は胸で合掌をし、持物はない。また子供も伴っていない。正面を向いているのは、祈禱の尊神鬼子母神画像として用い

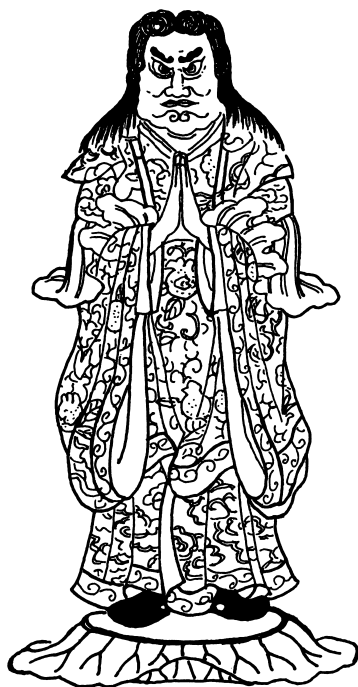


図19 鬼子母尊神立像 東京 宝性寺別院

られているからと思われる。画像の他に同じ尊容の木彫像も東京宝性寺別院などはじめ多く祀られている。

他方、有角抱児形といわれるものは、有角、露牙、裂口で子供を懷中に入れるか抱いている動的な像である。角を有さないものもあるが目をもいて、いかにも鬼を思わせる面構えである。東京鉢仙院の彫像や、本佛寺の画像などにその例を見ることができる。このような鬼面の訶梨帝母の発祥をどうとらえるかについては、今後の研究を待たねばならぬ点もあるが、あきらかに経軌や図像集に説かれている像ではない。おそらく我国の時代ごとの風潮に合わせてようにして造像されたものと思われる。こうした鬼面の訶梨帝母についてみるならば、一般論通り、室町末期から江戸時代に現われた、明らかに我国独自のものと言えよう。

しかし、中山総髪合掌形に類する像については、必ずしも俄に生れ出たものではなく、護法善神としての訶梨帝母像容が変遷していったものと思われる。

## 結び

訶梨帝母像の形相を発祥から追ってみた。当初ガンダーラやマトウラーでは柔和相で、夫のパンチカ、あるいはクベラと二神並坐像で表現されていたが、やがて各々は独尊となり、パンチカは我国に至って鎮守毘沙門天に化したとも、財宝神大黒天になったともいわれている。

柔和尊訶梨帝母は儀軌にも造像法が説かれている一方で、アジア各地にその地域性に富んだ独特の像容でも広められていった。特に坐勢においては、倚坐勢から遊戲坐勢へと推移した過程に注目したい。我国では儀軌に則った形像で、幾多の坐像が存在している。それは数児を伴った独尊で現わされている。

他方忿怒尊のうち、護法尊の天母形訶梨帝母は、図像集などに他の尊と共に著わされており、その中で子供を伴わない立像の独尊は密教の中で、訶梨帝母信仰の対象として発展していった。護法尊としての尊格は、教理には古くから説かれていたのであり、形像では鬼神として西域や中国で表現されていたと伝えられたり、チベットにおいては壁画に護法尊として描き残されている。そしてこれらは常にパンチカつまり大黒天と一対で、門前の柱や壁面に表わされることが多かった。

かつては二神並坐像であったハーリティとパンチカ像は、生産豊饒の女神訶梨帝母神と、福德財宝神大黒天として独立していったにもかかわらず、我国においてもたとえば日蓮宗寺院など訶梨帝母が祀られる寺院では必ず大黒天も祀られていることは興味の持たれることである。



さて日蓮宗においては鬼形の鬼子母神を法華經擁護の尊神として尊崇しているが、その中にも二種の異形式があるがしかし、たとえば祈禱本尊鬼子母神といわれる画像の中山総髮合掌形像においては鬼形というより、明らかに天母形忿怒尊であり、これは経軌等の中で説かれる密教尊に含まれる護法尊の尊容に類似し、儀軌に従った形像ということができよう。護法尊が忿怒相でなくてはならないのは、修法上、特に調伏等に用いられるからであり、正面向きに現わしているのは、祈禱の尊神として、信仰の対象となったからと思われる。この像は彫像でも現わされている。

他方の鬼面鬼形鬼子母では、頭に角を有したり、裂口で牙を露出するものまで表現されていかにも鬼の様相を具現化しており儀軌には説かれていない関西系の鬼子母神といわれるものである。これは庶民を対象とし、室町末期から江戸時代の風潮の中で、夜叉女あるいは羅刹女の形相を現表したものと思われるが、信仰の上でどのように用いられてきたのか、具体的にはつかめていない。

先の総髮合掌形像は全国的に流布されており儀礼、修法の本尊であることは、すでに周知されるところである。このように考察を進めて来ると、まず総髮合掌形を鬼形として考えるべきとは思われ難く、延いては、その発祥を、室町末期以降に、にわかに出現した我国独自のものとするのは妥当ではないことが明らかとなるであろう。

子供を伴う柔和尊が説かれ造像される他方で、尊神としての忿怒尊が信仰の対象として同時に造像され尊崇されている。このことは、訶梨帝母の尊容は、柔和尊から忿怒尊へと変遷を経たのではなく、元来形相には二類存在し得る要素を具していたと考えるべきで、特に忿怒尊においては密教色豊かな地域において、他宗教とも交わりながら修法、儀礼と共に発展を遂げていき、我国独特の尊神像となるに至ったものとするべきであろう。

## 〔注〕

- (1) 拙稿「訶梨帝母の持物・『吉祥菓』について」(『名古屋造形芸術短期大学研究紀要』第七号、昭和五九年)。
- (2) 拙稿「ネパールにおけるハーリティーについて——調査報告——」(『同朋学園佛教文化研究所紀要』第六号、昭和五九年)。
- (3) パールバティー女神など。
- (4) 〔注1〕参照。一〇五頁——一〇八頁。
- (5) 拙稿「訶梨帝母の形相の二類型について(上)——十六大護図にみる忿怒尊訶梨帝母像をめぐって——」(『名古屋造形芸術短期大学研究紀要』第八号、昭和六〇年)。
- (6) 拙稿「訶梨帝母の形相の二類型について(中)——宝楼閣経曼荼羅にみる訶梨帝母像をめぐって——」(『名古屋造形芸術短期大学研究紀要』第九号、昭和六一年)。
- (7) 〔注2〕、一〇四頁、写真25、〔地図※1〕。
- (8) 高橋堯昭『PANCHIKAとHARITI』八頁、⑩〔地図※2〕。
- (9) 訶梨帝母の末児の名については、〔注1〕、一〇八頁。
- (10) 〔注2〕、一〇八頁、写真31、〔地図※3〕。
- (11) 同右、一〇四頁、写真26、〔地図※4〕。

- (12) [注1]、一四四頁、図21、(地図※5)。
- (13) cf. L. S. Banglel, *The Early Sculptures of Nepal*, New Delhi, 1982, p.146. (地図※6)
- (14) 小川貫弌「パンチカとハリーティーの帰仏縁起」(小川貫弌『佛教文化史研究』永田文昌堂、昭和四八年)。
- (15) 高田修・田枝幹宏『アジャンタ』平凡社、昭和四六年。  
cf. R. S. Gupta, *Iconography of the Hindus Buddhists And Jains*, Bombay, 1980.
- (16) [注2] 参照。
- (17) [注5] 参照。
- (18) [注2] 参照。八三頁——八四頁。
- (19) 蓮見治雄日本語版監修『モンゴルの曼荼羅』新人物往来社、昭和六二年、(地図※7)。
- (20) 立川武蔵『仏教のイコノロジー—曼荼羅の神々』ありな書房、昭和六二年、一二六頁——一二八頁  
[注1]、[注5]、[注6] 参照。
- (21) [注5] 参照。
- (22) cf. Heinrich Zimmer, *The Art of Indian Asia*, New York, 1946.
- (23) 伊東照司『東南アジア仏教美術入門』雄山閣、昭和六〇年。
- (24) [注1] 参照。一四〇頁、図15、(地図※8)。
- (25) 同右、図16、(地図※9)。
- (26) 『寺門傳記補録』第四祠廟部丁(『大日本佛教全書』二十卷)、五六頁——六七頁。

- (27) 二十八部衆の中の訶梨帝母の名称は、神母天王、神母女など。
- (28)〔注1〕参照。一四一頁、図17、〔地図※10〕。
- (29)〔注1〕参照。一一七頁—一二〇頁。
- (30) 訶梨帝母の持物については特に〔注1〕を参照。
- (31)〔注1〕参照。一三八頁、図12、〔地図※11〕。
- (32) 同右、一三九頁、図13、〔地図※12〕。
- (33) 同右、一三八頁、図11、〔地図※13〕。
- (34) 訶梨帝母の子供の数については〔注1〕、〔注6〕参照。
- (35)〔注1〕、〔注5〕、〔注6〕参照。
- (36)〔注5〕参照、〔地図※14〕。
- (37)〔注6〕参照、〔地図※15〕。
- (38)『覺禪抄』巻第四九「如意輪」七星如意輪曼荼羅、『大正藏』図像部四、八七七頁、『別尊雜記』巻十八、如意輪(『大正藏』図像部三、二三一頁、〔地図※16〕)。
- (39)〔注5〕参照。
- (40)〔注1〕、〔注5〕参照。
- (41)〔注6〕参照。
- (42) 同右、図2、図3、〔地図※17〕。

(43) (注34) 参照、〔地図※18〕。

(44) (注5) 参照。図1～図4。

(45) (注5) 参照。

(46) (注1)、一四八頁、図30、〔地図※19〕。

(47) 紀秀信『佛像圖彙——儀軌による仏像図版集——』国書刊行会、昭和四九年、〔地図※20・21・22〕。

(48) 同右、

(49) 総髪で合掌する鬼子母尊神立像を「中山流鬼子母神」と称し、中山法華経寺の祈禱本尊鬼子母の像形である。遠寿院流、智泉院流の祈禱法に用いられる。

宮崎英修「鬼子母神—神化の確立」、『鬼形鬼子母神の出現』（宮崎英修編『鬼子母神信仰』民衆宗教史叢書、第九巻、雄山閣出版、昭和六〇年）。

(50) 東京宝性寺別院はじめ、鉢仙院、名古屋栄立寺など多く現存している〔地図※23〕。

(51) (注1)、一四九頁、図32、〔地図※24〕。

(52) 同右、一五〇頁、図33、〔地図※25〕。

# 掲載図版及び写真所蔵者・提供者一覧

図1. ハーリティーとパンチカ坐像

〈ガンダーラ〉

福祐寺

2. ハーリティー坐像

〈ガンダーラ〉

大和文華館

- |     |                  |          |  |
|-----|------------------|----------|--|
| 3.  | ハリーティール立像        | 〈ガンダーラ〉  | 高橋堯昭氏  |
| 4.  | ハリーティールとクベラ坐像    | 〈マトウラー〉  | L.S. Bangdel: <i>The Early Sculptures of Nepal</i>   |
| 5.  | ハリーティール坐像        | 〈マトウラー〉  | 立川武蔵氏  |
| 6.  | ハリーティール坐像        | 〈マトウラー〉  | L.S. Bangdel: <i>The Early Sculptures of Nepal</i> . |
| 7.  | ハリーティールとパンチカ坐像部分 | 〈アジャントア〉 | 平凡社  |
| 8.  | ハリーティール坐像        | 〈ネパール〉   | Balaju 寺   |
| 9.  | ハリーティール坐像        | 〈ネパール〉   | Chapatol 個人宅   |
| 10. | ハリーティール坐像        | 〈ネパール〉   | Thapity 寺  |
| 11. | 訶梨帝母衆部分          | 〈中国〉     | 学習研究社  |
| 12. | 訶梨帝母坐像（三子二侍女）    | 〈日本〉     | 『全日本佛教全書』  |
| 13. | 訶梨帝坐像（五子）        | 〈日本〉     | 『大正藏』  |
| 14. | 鬼子母立像            | 〈日本〉     | 『大正藏』  |
| 15. | 訶梨帝立像            | 〈日本〉     | 『大正藏』  |
| 16. | 神母女立像            | 〈日本〉     | 『大正藏』  |
| 17. | 神母天王立像           | 〈日本〉     | 蓮華王院三十三間堂  |
| 18. | 護法善神立像           | 〈日本〉     | 講談社  |
| 19. | 鬼子母尊神立像          | 〈日本〉     | 宝性寺別院  |

- |   |              |         |  |
|---|--------------|---------|--|
| ① | ペル・ラモ像       | 〈チベット〉  | Bikkhu Sumati Sangha氏                    |
| ② | ハーリティーと五人の童子 | 〈コータン〉  | 講談社                                      |
| ③ | ハーリティー母子像    | 〈トルファン〉 | A. Von Le Coq: Chotscho.                 |
| ④ | ハーリティー母子像    | 〈ジャワ島〉  | Heinrich Zimmer: The art of Indian Asia. |

# 追記

図版においては原画及び実物を正確に、より忠実を心掛けた、筆者の模写による白描画を掲載した。資料の提供及び、現地での写生に快くご協力下さいました諸氏に深謝の意を表します。